

『中辺分別論』における円成実性の sad-asat-tattva 再考

Vo Thi Van Anh

0. はじめに

本稿で扱うテーマは、かつて葉阿月1971（「円成実性としての sad asac ca tattva」）が論じられたものである。そこでは「無の有」という真実は円成実性の性質であると指摘されている。それ以来四十年余、三性説の研究はますます進んでいったが、円成実性については、現在の学界において、必ずしも明確になってないと思われる。本稿では、葉氏と同じく『中辺分別論』第III章第3偈に説かれる円成実性の sad-asat-tattva という規定を安慧の註釈に基づいて再検討し、円成実性の性質を明らかにしたい。

1. 複合語 sad-asat-tattva の解釈から見た円成実性理解の問題

まず、『中辺分別論』第III章「真実品」では、従来の仏教におけるさまざまな真実が三性説と関係づけて説かれる。その中、最初に「根本真実」として三性を次のように提示する。

《省略》 asac ca nityaṃ sac cāpy atattvataḥ

sad-asat-tattvataś ceti svabhāva-traya iṣyate // (III.3)

〔遍計所執性は〕常に無である、〔依他起性は〕有であるが真実としてではない、そして

〔円成実性は〕 sad-asat-tattva (yod dang med de kho na) としてである、^①というのは三性における〔真実である〕と認められる。

この中、特に円成実性の解釈について、偈文 c 句 sad-asat-tattvataś ca に対して、世親自身は何も解釈を施さない。ただし、チベット訳は yod pa dang med pa'i de kho na であり、有と無は並列複合語 (Dvandva compound、以下 Dv) として、そして、その「有と無 (sad-asat)」と「真実 (tattva)」との関係は同格限定複合語 (Karmadhāraya compound、以下 Kdh)

として理解している。この箇所について安慧は次のように註釈している。

pariniṣpannalakṣaṇaṃ sadasattattvaś ceti, ^②“sad asat tattvaṃ ca” ^② pariniṣpan-
nalakṣaṇaṃ / dvayābhāvabhāvatmakatvāt sattvaṃ, dvayābhāvātmacatvād asattvaṃ ca,
viśuddhyālambanatvāt tattvaṃ / etat pariniṣpanne svabhāve tattvaṃ, aviparitatvād iti
sambadhyate // ^③

そして円成実相は sadasattattva (yod dang med pa [de] kho na) としてであるとは、有と無と真実 (yod pa dang med pa dang de kho na) が円成実相である。〔所取・能取の〕二が無であることの有を本性とするから有である。そして二が無であることを本性とするから無である。清浄所縁であるから真実である。これが円成実性に関する真実であり、不顛倒であるからという文脈である。

この引文の中、波線部に注目したい。安慧は、sad-asat-tattva を三つに分けて解釈する。いずれも ablative + nominative という型式で根拠を説明しているという点から、並列の関係が見てとれる。すなわち、安慧釈では、sad-asat-tattva を Dv として説明しているのである。

これについて、有と無と真実との三種それぞれが円成実性の性質であると安易に理解してはならない。なぜなら、世親釈（以下 MAVBh）のチベット訳が「有と無という真実」として、また後述するように、これは円成実性の主なる意味であるから、安慧も当然、このような円成実性の理解を有していたはずである。また、この三種を並列にしても、有と無を最終的に真実に結びつけ、真実はそれらに関するのみであるとしていたならば、tattva の解釈の中にその意図が表されるはずである。しかし、実際にそれは見られない。つまり、「有と無という真実」は tattva の一つの側面でもあるが、それだけではない、ということが彼の Dv 解釈から窺えるであろう。

さらに、安慧は tattva を説明する箇所に「清浄所縁」(viśuddhyālambaṇa) という概念を用いており、この用語をどのような複合語として理解すべきかがこの問題の焦点であると考えられる。しかし、ここで安慧はその点を明確にしていない。

また、上に引用した「不顛倒であるからという文脈である」の一文も、後述のように、円成実性の二次的意味を示す可能性もあるので、注目に値する。

これらの課題について以下順次に検討していく。

2. 有・無の性質について

まず、有と無について考察していきたい。瑜伽行派にとって所取・能取は虚妄なのであって、

それらが存在しないこと、それが円成実性である。ただし、安慧は「円成実性は単に二取が無いだけではない」と言い^④、上述の「〔所取・能取の〕二が無であることの有」という性質も重要なことであると知られる。

これに関する記述が、円成実性の異門とされる空性の定義、すなわち、同論の第 I 章第 13 偈^⑤ ab 句の所説にも見られる。そこにおいて有と無について安慧はさらに次のように説いている^⑥。

〔問い〕 無 (abhāva) という語は有 (bhāva) を否定する語であるから、有という語がなくてもこの意味は理解されるから、ここでは有の語は余分である。〔答え〕 余分ではない。二の無が空性の相であるということだけを説示するならば、二の無の単独性のみが、ここで兎角の無の如くに理解され、苦性などの如くに法性を本質とすることが〔理解され〕ないのである。それ故に、このように空性は二の無であると説かれ、そして、その〔二の〕無が虚妄分別において有るのが空性であると説かれるのである。無は有の相に包摂されるから、法性を本質とすると顕示されるのである。

ここで、瑜伽行派における無に関して注意すべきことが述べられている。つまり、安慧は、「無」という語は有を否定するものであるから、「有」の語がなくてもその意味をもたらす、という反論に対し、「有」の語が付加される理由は空性を正しく理解するためであり、兎角の無のような空性理解を避けるためであると説明するのである。

以上は、少なくとも無は有を伴うべきであり、安慧釈の Dv について三つの概念を単独に理解してはいけない一つの根拠である。ちなみに、ここで tattva に言及してはいないが、かりに空性が tattva であるとすれば、その「有と無」と tattva との関係は Kdh となる。これは後に述べるように、円成実性の主なる意味である。

3. 「清浄所縁」について

3.1 『中辺分別論』安慧釈に用いられた「清浄所縁」

安慧は sad-asat-tattva の中の tattva を「清浄所縁であるから真実である」と解釈しているが、その「清浄所縁」の語がどのような複合語として用いられているのかについては、同論の安慧釈の他の箇所における用例を検討すべきである。以下、それらの用例を考察していく。

『中辺分別論』I.12 は空性の要約として①相、②異門、③その意味、④区別、⑤論証という^⑦五点を挙げる。その中、①・②・③についての安慧釈は次の通りである^⑧。

さらに、どうしてこれらの種類によって空性が知られるべきであるのか？①〔空性は〕清浄所縁であるから、清浄を求める者たちによって相という点から知られるべきである。②別な諸經典における異門の説示に対して混乱しないために、異門という点から〔知られるべき〕である。③異門の意味を理解すれば、空性は清浄所縁であると決断するから、異門の意味である。《後略》

ここで「清浄所縁」は二箇所に現れる。前者は、空性の相の解釈であるから、Kdh（清浄という所縁）の意味を持つと思われる。この相は論の本偈（以下 MAVk）には第13偈^⑨に説かれる「二つの無と、〔その〕無の有が空性の相である」という内容であり、これを安慧は「清浄所縁」の語をもって解釈する。つまり、これは前述の III.3 に対して「有と無という真実」を「清浄所縁」とする解釈ともつながるのである。

後者は、本偈14-15に対して安慧の理解として示されるものと思われる^⑩。すなわち、そこに説かれる空性の異門は真如・實際・無相・勝義性そして法界であり、この五つは、『摂大乘論』に引用された『阿毘達磨大乘經』が説示する四種清浄法の中の、本性清浄の内容でもある^⑪。つまり、この場合の「清浄所縁」の用例も Kdh（清浄という所縁）として用いられるのである。

『中辺分別論』I.13d 句は空性と虚妄分別との同一と別異についての議論である。^⑫

もし同一であるならば、清浄所縁もなくなり、共通相もないであろうとは、これによって浄化されるから清浄であり、〔それは〕道である。〔同一であれば法性は〕法の自相と別ではないから道の所縁ではないであろう。法の自相〔は道の所縁ではない〕如くである。

《中略》

あるいはまた、清浄のための所縁が清浄所縁である。事物の自相が所縁であれば、清浄に至ることがなくなる。一切の有情が清浄であるという〔過失〕に陥るからである。

ここでは、空性と虚妄分別は別でも同一でもない議論する際に、世親が用いる「清浄所縁」を、安慧は格限定複合語（Tatpuruṣa compound、以下 Tp）として説明している。前者は gen. Tp.（浄化の所縁）である。後者は dat. Tp.（清浄のための所縁）であると考えられる。

以上、『中辺分別論』安慧釈に用いられる「清浄所縁」の用例を検討した結果、そこには二様の複合語理解が見られるのである。すなわち Kdh（清浄という所縁）と Tp（浄化の所縁、清浄のための所縁）の理解である。この用語の意味するものを詳細に理解するために、以下で同学派の文献における「清浄所縁」の用例を検討する。

3.2 瑜伽行派における「清浄所縁」の用例

『解深密経』勝義諦相品（第四章）

善現（*Subhūti）よ、私は諸蘊の中清浄所縁は勝義諦であると述べた。私は諸處・縁起・食・諦・界・念住・正斷・神足・根・力・覺支・八支聖道の中清浄所縁は勝義諦であると述べたので、諸蘊の中清浄所縁は一味相であり、無別異相である。^⑬

『解深密経』無自性相品（第七章）

勝義生（*Paramārthasamudgata）よ、諸法の勝義無自性性とは何か？縁生法、すなわち生無自性性によって無自性であるもの、それが勝義無自性性によって無自性でもある。それはどうしてか？勝義生よ、諸法における清浄所縁を私は勝義である説き、依他起は清浄所縁ではないので《後略》。^⑭

上は『解深密経』の二つの章に見られる「清浄所縁」の用例である。「勝義諦相品」では、「清浄所縁」は勝義諦であり、それは一味・無別異の相と説かれるので、明らかに Kdh（清浄という所縁）としての意味を有するであろう。

「無自性相品」では勝義無自性性^⑮に関する文脈の中で、やはり「清浄所縁」は勝義であると説かれている。そこに「清浄所縁」の複合語が用いられるのは、依他起を前提としながらも、依他起の性質ではなく、円成実の性質として説かれるのである。この場合、どのように複合語を理解すべきかはっきりしないが、上引の、世尊の説示に対して勝義生菩薩の理解を述べる一節では、「清浄所縁」の語を「法無我」「真如」と並列にして、円成実相として規定していることが見られるので、Kdh（清浄という所縁）として用いられている可能性がある。^⑯

『瑜伽論』「撰決択分中菩薩地」

「撰決択分中菩薩地」には、上の『解深密経』の一節が引用される箇所があることは言うまでもない。さらにその他の用例を次に列挙しておく。

- 〈1〉 真如は世俗有とすべきか、勝義有とすべきかと言うならば。勝義有とすべきである。清浄所縁を本質としているので。^⑰
- 〈2〉 〔五事の中、〕 どれが劣っている、どれが勝れているかと言うならば。〔前〕 三は〔その〕二種類ともある。真如は勝れている、清浄所縁という意味によってであり、下劣から勝へ進んでいく本質をもつという意味によってではない。正智も勝れているのである、真如を行境とするという意味によってである。^⑱

〈3〉〔五事の中、〕どれが有上である、どれが無上であるかと言うならば、〔前〕四は有上¹⁹である、真如は無上である、無爲であり、そして清浄所縁という意味によってである。

ここでの「清浄所縁」は真如の説明のためにあり、真如が勝義有、勝れている、無上であることの理由として用いられている。この場合、「清浄所縁」が Kdh（清浄という所縁）として理解されることは疑いない。

一方、無著の『顕揚聖教論』には上で見てきたものより進展した解釈が見られる。以下の用例に着目したい。

『顕揚聖教論』「成無性品」第15偈²⁰

清浄之所縁 常無有變異 善性及樂性 一切皆成就

論曰。由勝義諦離一異性故。當知即是清浄所縁性、何以故、由縁此境得心清浄故。當知亦是常、於一切時性無變異故、又由清浄所縁故。當知是善、以是常故當知是樂。

ここで清浄所縁は二箇所で現れる。前者は、勝義諦を説明して、その理由を「この境に縁って心が清浄となる」としている。この解釈から、Tp（清浄のための所縁）としていることが明らかになるのである。後者は、勝義諦の「常無有変異」を説明するので、以前の諸文献と同様に Kdh として用いられると思われる。

『摂大乘論』II. 15c²¹

もし、それ（遍計所執）が永久に無い相が円成実性であるならば、それが如何にして円成実性であり、どうして円成実と呼ばれるのか？

変異しないことから円成実である。また、清浄所縁であり、一切善法の中の最勝のものであるので、最勝の意味という点で円成実と呼ばれる。

ここに論述される「清浄所縁」は『摂大乘論』自体を詳細に検討した上で判断すべきと思われる。しかし、少なくとも「清浄所縁」は「変異しないこと gzhan du mi 'gyur ba」とは独立した文句であり、それを後の文章で説明するのである。すなわち、この「清浄所縁」は真如の方面である清浄という所縁とも理解される一方、教法あるいは修行道（顛倒しないこと）の方面を指すと理解することもできる。つまり、これも Tp（清浄のための所縁）として理解出来るのである。

『三十論』

①『三十論』第22偈 ab 句では円成実性と依他起性との不一不異の本質が論じられる。

《省略》なぜなら、もし別でないのであれば、その場合はまた、円成実性は清浄所縁をもつのではないことになろう。依他起の如くに、雑染を本性とするからである。同様に、依他起は煩惱を本性とするものではないことになろう。円成実と別ではないからである。円成実の如くである。

②最終の第30偈において、唯識性の体得を説明する際、その用語も用いられる。

善とは、清浄な所縁であるから、安穩なものであるから、そして無漏法から成るものであるから。

この中、①の場合は、依他起に対しての「清浄所縁」は円成実性の性質であることを前提としていることが当然認められている。これは『解深密経』『無自性相品』と同じく、判断しがたい用例ではある。上訳では所有複合語 (bahuvrīhi compound、以下 Bv) としているが、後述の世親本論とこれに対する安慧釈から考えれば、Kdh (清浄という所縁) として理解してもよいと思われる。②の場合は、真如の側面を指し、また viśuddha という形容詞で用いられるので、Kdh として理解すべきであろう。

3.3 安慧の意図した「清浄所縁」

以上の検討から、清浄の語を伴う所縁の用語については、依他起性を前提とする円成実性解釈の場合、後期唯識論書では Tp として解釈されることが多いにもかかわらず、上引の『三十論』では Kdh としても、Bv としても可能性がある。つまり、この場合は Tp、Kdh、Bv の三種とも理解される。

無著の論書の中、『摂大乘論』の用例は明確でないとしても、『顕揚聖教論』には明らかに「清浄のための所縁」という Tp 解釈が見られる。

ここに注目したい点は、『解深密経』『瑜伽論』『摂決択分中菩薩地』では、「清浄所縁」は勝義諦・真如、すなわち Kdh として用いられているのに対して、『顕揚聖教論』では、それが Tp として理解されているということである。すなわち、ここに転換点が見られる。

以上検討したところ、『三十論』を除いて、『中辺分別論』安慧釈に先行する諸文献の中では Kdh、及び Tp の用例が用いられる。安慧は同論 III.3 の円成実性を解釈する際、これら二種を念頭において、清浄所縁の語を用いるのではないかと思われる。以下はそれらを要約して表に示しておく。

Karmadhāraya	Tatpuruṣa	
『解深密經』勝義諦相品	『顯揚聖教論』成無性品の一部	
『解深密經』無自性相品	『攝大乘論』II.15c	△
『瑜伽論』「摂決択分中菩薩地」	『中辺分別論』I.13安慧釈	
『顯揚聖教論』成無性品の一部		
『中辺分別論』I.12安慧釈		

△ はその可能性があると思われるが更に考察の余地がある。

「清浄所縁」の解釈に関して、最後に、清浄を伴う所縁という用語に限らず、瑜伽行派における修行道に関する所縁の視点からも考察したい。

『中辺分別論』第Ⅴ章の中「所縁無上」の所説^⑤において、「清浄所縁」の二重の意味と合致する例が確認できる。すなわち、そこに説示する十二種所縁の中、①安立するものとは波羅蜜多・菩提分・聖諦などの教法であり、②その通りの界（法界）とは真如である。これらの二つの所縁は後の⑩までの諸所縁にはたらくと解釈されている^⑥。つまり、教法と真如という二種の所縁は修行道体系に基づく諸々の所縁を包括するのである。安慧の sad-asat-tattva の解釈中に用いた「清浄所縁」はこの二種の所縁を念頭においたものではないかと思われる。

4. 円成実性について

4.1. 「清浄所縁」の二重意味と円成実性の二種解釈との合意

「清浄所縁」という円成実性の性質を二種とする重要な根拠が『中辺分別論』III.11に説かれる。そこでは円成実性が「無変異」と「無顛倒」との二種であるとされ、安慧は複合語の多義によって、III.3に説かれる円成実性の sad-asat-tattva を、III.11に説かれる円成実性の二種類に一致させていると思われる。以下にその本偈と世親釈を引用する^⑦。

無変異と無顛倒との円成実によって二つがある。(III.11cd)

無為は無変異の円成実という観点から円成実〔性〕である。道諦に含まれる有為は無顛倒の円成実という観点から〔円成実性〕である。知るべきものに関して無顛倒であるからである。

ここに言及する円成実性の「無変異」(nirvikāra) と「無顛倒」(aviparyāsa) のうち、特に後者は、前節に留意した安慧釈の最後に示された「不顛倒であるからという文脈である」の文言と完全に一致する。この「無顛倒」の円成実には複雑な意味があると思われるが、これについては今後の課題としたい。Sad-asat-tattva の解釈における安慧釈の意図はこれで理解するこ

とができた。

ところで、上引の議論の前提は勝義諦の三種の解釈であり、その中、これまで本格的に登場していない「道 mārga」も勝義に収められるので、その解釈のために上に引用した一節が述べられるのである。ここに興味深い点がある。MAVBh は道も勝義であると弁明するために円成実性の二種類をもって議論する。しかし、偈文のみを見れば、勝義諦の二次的な意味だけでなく、円成実性の二次的な意味、すなわち、無顛倒の意味も、『中辺分別論』以前の段階には、円成実性の性質としては本格的に説かれていない。しかしいずれにせよ、この解釈は同学派の後期文献でも支持されるので、同学派の円成実性の完成した定義であると考えられる。

4.2. 二次的な円成実性解釈に関する世親と安慧の視点

上述の二次的な円成実性は『中辺分別論』において確立されたと見られる。本節ではその『中辺分別論』の註釈家である世親と安慧の視点を一考しておきたい。

上の MAV-III.11cd を引用した一節、円成実性の二種の性質について、世親は当然偈文に沿って註釈している。しかしながら、これ以外に、円成実性解釈の箇所、すなわち、同論の I.5、III.3、あるいは『大乘莊嚴經論』XI.41 などに対する註釈のみならず、彼自身の著作、『三十論』あるいは『三性論』にも二次的な円成実性が意識される根拠は見当たらない。

一方、安慧は常にその二次的な円成実性を意識していると言える。『中辺分別論』の註釈には前掲の三箇所の中、これまで見てきた III.3 と III.11cd 以外に、I.5 にも、あるいは第 V 章正行無上「随法行中十金剛句」中でも厳密にその二次的な意味をもって解釈する。また、世親の『三十論』を註釈する際、彼は当然に、論の意趣に沿って註釈を行ったが、円成実性の二種の性質を念頭において冒頭の一文に「その円成実性は無変異の円成実としてである」と述べている。つまり、これは、円成実性には二種の意味があるが、論の主題によって「無変異」の円成実性の側面のみを展開していることを示唆する。

以上、円成実性解釈について、世親と安慧の視点を吟味してきた。その中、三性説を第一に顕揚するという世親の功績はよく知られるとおりであるが、彼の著作では、円成実性の二次的な意味が用いられていない。すなわち、二次的な円成実性が『中辺分別論』以降の文献では注目されておらず、「二取の無は有る、二取が無い」という真実のみが円成実性についての一般的な定義になっていくのである。この一面的な円成実性こそが、清弁の *Madhyamakahrdaya-kārikā* 『中観心論頌』第 V 章、また、*Prajñāpradīpa* 『般若灯論』第 XXV 章において批判の対象となるのではないと思われる。

5. 終わりに

以上の通り、円成実性の sad-asat-tattva について、安慧の並列複合語解釈の意趣が明らかになった。つまり、「清浄所縁 viśuddhyālamkāra」は多義の複合語であり、円成実性の二種の性質を意趣していたものであると理解すべきである。

またこの際、二次的な円成実性が安慧にとっては重要な位置を占めているのに対して、彼に先行する世親の諸論書にはそれに対する言及が見られないという相違を指摘できる。

最後に、円成実性解釈について、安慧の慎重な態度から考えれば、清弁の円成実性批判が背景にあるのではないかとも思われる。今後両者の関係を考察する際に注目すべき点として提示しておきたい。

参考文献の略語

- MAVBh: P.5528; D.4027; 真諦訳 T.1599.31. 玄奘訳 T.1600.31; [Na]: Gadjin Nagao (ed.) *Madhyāntavibhāga-bhāṣya*, 鈴木学術財団、1964, Tokyo; [Ta]: N.Tatia & A.Thakur (ed.) *Madhyāntavibhāga-bhāṣya*, Tibetan Sanskrit Work Series 10, Patna, K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.
- MAVṬ: P.5534; D.4032; [Ya]: Susumu Yamaguchi (ed.) *Madhyāntavibhāga-ṭīkā*, Hajinkaku, Nagoya, 1934.
- 『三十論』: Hartmut Buescher (ed.) *Sthiramati's Trīṃśikāvijñaptibhāṣya: critical editions of the Sanskrit text and its Tibetan translation*, Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, Wien, 2007.
- 『三性論』: *Trisvabhāvanirdeśa*, Susumu Yamaguchi (ed.), 山口益仏教学文集、春秋社、東京、1972.
- 『解深密經』玄奘訳 T0676.16; P.774; D.106. [Lamotte]: *Samdhinirmocana Sūtra: L'explication des Mysteres by Etienne Lamotte*, Paris: Adrien Maisonneuve, 1935.
- 『攝大乘論』: T1594.31 玄奘訳; P.5549; D.4048; 長尾 雅人『攝大乘論和訳と注解』上1982下1987、講談社、東京。
- 『攝大乘論釈』: T1597.31 玄奘訳; P.5551; D.4050.
- 『瑜伽師地論』『摂決摂分』: D.4038, P.5539, T.1579.
- 『顯揚聖教論』: T1602.31。
- 『中辺分別論』: MAVk 本偈・MAVBh 世親釈・MAVṬ 安慧復釈の総称。
- 『大乘莊嚴經論』: Mahāyānasūtrālamkāra : exposé de la doctrine du Grand Véhicule / par Sylvain Lévi, Pari 1907, rep. Rinsen book, Kyoto 1983; 『『大乘莊嚴經論』和訳と註解: 長尾雅人研究ノート』 長尾文庫編長尾文庫、2007-2011.

S. Jaini: *Abhidharmadīpa with Vibhāṣāprabhāvṛtti*, critically edited with notes and introduction by Padmanabh S. Jaini, [2nd ed.], Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1977.

高橋晃一

2005 『『菩薩地』『真實義品』から『摂決摂分中菩薩地』への思想展開: vastu 概念を中心として』 山喜房佛書林。

金才権 (Kim Jae Gong)

2007 『『中辺分別論釈疏』第三章「真実品」の文献学的な研究』、龍谷大学博士学位請求論文、Vol. II。

三穂野英彦

2003 『Madhyāntavibhāga 第1章相品における理論と実践』第二部附論、広島大学博士学位請求論文。

早島慧

2014 『中観・瑜伽行兩派における二諦説解釈の研究：『大乘莊嚴經論』第六章 tattva を中心に』、龍谷大学博士学位請求論文。

兵藤一夫

2010 『初期唯識思想の研究：唯識無境と三性説』、文栄堂、京都。

葉阿月

1971 『円成実性としての sad asac ca tattvam』印度學佛教學研究 20(1), pp.373-382.

〈附註〉

本稿では、引用した安慧釈文の中、ボールドの部分は世親釈を示すもの、ボールドプラス下線は偈文の部分、イタリックの部分は還元梵文である。また、波線の部分は筆者が注目したい点である。

註

- ① この偈頌を世親釈と共に示せば、次のようである。MAVBh. [Na37,20-38,7; Ta 18,17-19,3] :

kim atra svabhāva-traye tattvam iṣyate /

asac ca nityaṃ sac cāpy atattvataḥ

sad-asat-tattvataś ceti svabhāva-traya iṣyate // (III.3abcd)

parikalpita-lakṣaṇaṃ nityaṃ asad ity etat parikalpita-svabhāve tattvam aviparītatvāt [/]

paratantra-lakṣaṇaṃ sac ca na ca tattvato bhrāntatvād ity etat paratantra-svabhāve tattvaṃ / pariniṣpanna-lakṣaṇaṃ sad-asat-tattvataś cety etat (/) pariniṣpanna-svabhāve tattvaṃ /

[P13a1-a5; D10b3-b6]

- ② Tib : yod pa dang med pa dang de kho na. 諸校訂は *sad asac ca tattvam* としている。葉阿月 1971はこの校訂を根拠として議論するが、上のように読む根拠はその直後の文からである。

- ③ MAVT. [Ya 113,18-22; Kim 106];

[P 84b8-85a2; D 244a6-b1]: yongs su grub pa'i mtshan nyid ni // yod dang med pa [de] kho na ste / zhes bya ba ni yod pa dang med pa dang de kho na ni yongs su grub [244a7] pa'i mtshan nyid de / gnyis pa med pa yod pa'i bdag nyid yin pas yod pas so // gnyis po med pa'i bdag nyid yin pas med pa'o // rnam par dag pa'i dmigs pa yin pas de kho na'o // 'dir ni yongs su grub pa'i ngo bo nyid la de kho na ste / phyin ci ma log pa'i phyir ro zhes bya [244b1] ba dang sbyor ro //

- ④ 第I章第5偈三性の定義で安慧は次のように解釈する。

[Ya 23,7-11; 三穂野 p.165]: grāhyagrāhakābhāvaḥ pariniṣpannaḥ svabhāva iti, nirvikārapariniṣpattyaṃviparītapariniṣpattya ca pariniṣpannatvāt pariniṣpanna ucyate / iha hy abhūtaparikalpasya dvayarahitatā grāhyagrāhakābhāva uktaḥ, na tu dvayasyābhāvamātram /

「所取・能取が存在しないことは円成実性である」について、無変異の円成実と無顛倒の円成実という観点で、円成実であるから、円成実〔性〕と言われる。実はここに〔(MAV-I.1に) 説かれた〕虚妄分別が二つのものを欠いていることが、所取・能取が存在しないことであると述べられているが、〔円成実性は、〕単に二つのものが無いだけではない。

⑤ MAVBh [Na 22,23-23,2; Ta 5,17-19]:

dvayābhāvo hy abhāvasya bhāvaḥ śūnyasya lakṣaṇam / (I.13ab)

dvaya-grāhya-grāhakasyābhāvaḥ / tasya cābhāvasya bhāvaḥ śūnyatāyā lakṣaṇam ity abhāva-svabhāva-lakṣaṇatvaṃ śūnyatāyāḥ paridipitaṃ bhavati / [Tib.P5a3-4; D4a5-6]

実に、二つのものの無と、無の有が空〔性〕の相である。(I.13ab句)

二つのものの、すなわち所取・能取の無と、その無の有とが空性の相であるということにより、空性は無なる自性を相とすることが明らかにされたことになる。

⑥ [Ya 47.5-12; Bh&T 39.4-11]: *bhāvapratiṣedhavācakatvād abhāvaśabdasya bhāvaśabdābhāve 'py eṣo 'rtho 'vagamyata iti bhāvaśabdo 'trādhikaḥ, nādhiko dvayābhāvaḥ śūnyatālakṣaṇam itiyati nirdiśyamāne dvayābhāvasya svātantryam evātra gamyate śaśaviṣāṇābhāvavat, na duḥkhatādivad dharmitārūpatā, tasmād evam ucyate dvayābhāvaḥ śūnyatā / tasya cābhāvasyābhūtaparikalpe bhāvaḥ, śūnyatety ucyate, abhāvasya bhāvalakṣaṇaparigṛhītāt vād dharmitārūpatā pradarśitā* / [Tib.P47a2-5; D212a5-b1]

⑦ [Na 22,19-20]:

lakṣaṇam cātha paryāyas tadartho bheda eva ca

sādhanaṃ ceti vijñeyaṃ śūnyatāyāḥ samāsataḥ / MAV-I.12/

要約すれば、空性について相と異門とその意味と分類と論証を知るべきである。(I.12)

⑧ [Ya 46,8-12; Ms.13a4]: *kiṃ punaḥ kāraṇaṃ yad ebhiḥ prakāraiḥ śūnyatā vijñātavyā, viśuddhyālabhanatvād viśuddhyarthibhir lakṣaṇato vijñeyā / sūtrāntareṣu paryāyanirdeśeṣv asaṃmohārthaṃ paryāyataḥ, paryāyārthābodbhārthāc chūnyatāyā viśuddhyālabhanatvena niścīnatvāt paryāyārthaḥ* / [P46b2-4; D211b7-212a1].

⑨ 注⑤を参照。

⑩ *tathatā bhūtakotiś cānimittaṃ paramārthatā /*

dharmadhātuś ca paryāyāḥ śūnyatāyāḥ samāsataḥ / I.14/

ananyathā'viparyāsatannirodhāryagocaraiḥ /

hetutvāc cāryadharmāṇāṃ paryāyārtho yathākramaṃ / I.15/ [Na p.23所収].

要約すれば、空性の異門は、真如、實際、無相、勝義性、法界である。(I.14)

無変異であること、無顛倒であること、それが滅していること、聖者たちの領域であることによって、そして聖法の原因であるので、〔空性の〕異門の意味が順次に〔知られるべきである〕。(I.15)

⑪ 長尾雅人1982, p.362.

⑫ I.13dに説かれる「異別あるいは同一相ではない (na prthaktvāika lakṣaṇam) の中、「同一ではない」についての議論である。[Ya 48,23-49,8] : *ekatve sati viśuddhyālabhanam* na syāt sāmānyalakṣaṇāñceti / viśuddhyate 'neneti viśuddhir mārگاḥ***, *dharmasvalakṣaṇād ananyatvān mārگاḥlabhanam na syāt, dharmasvalakṣaṇavat* / 《中略》 *atha vā viśuddhyartham ālabhanam viśuddhyālabhanam na bhāvasvalakṣaṇam ālambyamānam viśuddhim āvahati sarvasattvaviśuddhiprasaṅgāt* / (*viśuddhyālabhanam: MAVBh 梵文では viśuddhyālabhanam jñānam であるが、同 MAVBh のチベット訳では訳していない。本 MAVT の梵蔵両者と

も jñānaṃ が存在しない; ** viśuddhir mārgaḥ; Ms. viśuddhimārgaḥ, Tib. rnam par dag pa ni lam mo) [Tib.P48a2-6; D213a3-6].

- ⑬ [Lamotte 50-51]: rab 'byor phung po rnam la rnam par dag pa'i dmigs pa gang yin pa de ni ngas don dam pa yin par yongs su bstan cing / rab 'byor skye mched rnam dang / rten cing 'brel par 'byung ba dang / zas rnam dang / bden pa rnam dang / khams rnam dang / dran pa nye bar bzhag pa rnam dang / yang dag par spong ba rnam dang / rdzu 'phrul gyi rkang ba rnam dang / dbang po rnam dang / stobs rnam dang / byang chub kyi yan lag rnam dang / rab 'byor 'phags pa'i lam yan lag brgyad pa la rnam par dag pa'i dmigs pa gang yin pa de ni don dam pa yin par yongs su bstan pa'i phyir ro / / phung po rnam la rnam par dag pa'i dmigs pa de'ang thams cad du ro gcig pa ste / mtshan nyid tha dad pa ma yin no / / (T0676.16.0691c25-29)
- ⑭ [Lamotte 68, 16-24; Peking 774. 18b4-7]: don dam yang dag 'phags / chos rnam kyi don dam pa ngo bo nyid med pa nyid gang zhe na / rten cing 'brel par 'byung ba'i chos gang dag skye ba ngo bo nyid med pa nyid kyi ngo bo nyid med pa de dag ni don dam pa'i ngo bo nyid med pa nyid kyi ngo bo nyid med pa'ang yin no / / de ci'i phyir zhe na / don dam yang dag 'phags / chos rnam la rnam par dag pa'i dmigs pa gang yin pa de ni ngas don dam pa yin par yongs su bstan la / gzhan gyi dbang gi mtshan nyid de ni rnam par dag pa'i dmigs pa ma yin pas 《後略》。(T0676.16.0694a20-)
- ⑮ 同様に説かれる無自性については、依他起の場合は勝義に関する無自性 (*paramārthena niḥsvabhāvatā, Tp) であり、円成実性の場合は勝義すなわち無自性 (paramārthaḥ niḥsvabhāvatā, Kdh) であると指摘されている。Cf.高橋2005 pp.201-202注46。
- ⑯ [Lamotte 81, 16-24]: bcom ldan 'das / bcom ldan 'das kyi bka' stsal pa'i don bdag gis 'di ltar 'tshal te / rnam par rtog pa'i spyod yul kun brtags pa'i mtshan nyid kyi gnas / 'du byed kyi mtshan ma de nyid kun brtags pa'i mtshan nyid der yongs su ma grub cing ngo bo nyid med de kho nas ngo bo nyid ma mchis pa nyid chos bdag ma mchis pa de bzhin nyid rnam par dag pa'i dmigs pa gang lags pa de ni yongs su grub pa'i mtshan nyid lags te / de la brten nas bcom ldan 'das chos rnam kyi don dam pa'i ngo bo nyid ma mchis pa de nyid las gcig 'dogs par mdzad lags so / / [T0676.16.0696b21-27]; 世尊。依此施設諸法生無自性性。及一分勝義無自性性。如是我今領解世尊所說義者。若即於此分別所行遍計所執相所依行相中。由遍計所執相不成實故。即此自性無自性性。法無我真如清淨所緣。是名圓成實相。世尊。依此施設一分勝義無自性性。
- ⑰ 高橋 p.125: de bzhin nyid kun rdzob tu yod par brjod par bya'am/ don dam par yod par brjod par bya zhe na/ smras pa/ don dam par yod par brjod par bya ste/ rnam par dag pa'i dmigs pa'i dngos po yin pa'i phyir ro// T1579.30.0696b22-24.
- ⑱ [P 'i.6b7-7a1; D zi.6b1-2]: du zhig dman pa [6b1] dag yin / du zhig gya nom pa dag yin zhe na / smras pa / gsum ni gnyi ga yin no / / de bzhin nyid ni gya nom pa yin te / rnam par dag pa'i dmigs pa'i don gyis yin gyi / nyams pa dang khyad par du 'gro ba'i bdag nyid kyi don gyis ni ma yin no / / yang dag [6b2] pa'i shes pa yang gya nom pa yin te / de bzhin nyid kyi spyod yul pa'i don gyis so / / (*P. omits kyi). T1579.30.0698a24-26.
- ⑲ [P 'i.7b3-4; D zi.7a3-4]: du zhig bla na yod pa dag [7a4] yin / du zhig bla na med pa dag yin zhe na / smras pa / bzhi ni bla na yod pa yin no / / de bzhin nyid ni bla na med pa yin te / 'dus ma byas dang rnam par dag pa'i dmigs pa'i don gyis so / / T1579.30.0698b19-20.
- ⑳ T1602.31.0559b5-10.

- ② [Nagao 上 p.74; P18a4-5]: gal te de gtan med pa'i mtshan nyid yongs su grub pa'i ngo bo nyid yin na / de ji ltar na yongs su grub pa nyid yin la / ci'i phyir na yongs su grub pa zhes bya zhe na / gzhan du mi 'gyur ba'i phyir yongs su grub pa'o // / nam par dag pa'i dmigs pa yin pa dang / dge ba'i chos thams cad kyi mchog yin pa'i phyir mchog gi don gyis* yongs su grub pa zhes bya'o // (*P.gyi; D.gyis)
- ③ [H.Buescher 124,19-21]: athānanya evam api pariniṣpanno na viśuddhyāmbanah syāt paratantravat saṃkleśātmakatvāt / evaṃ paratantraś ca na kleśātmakaḥ syāt / pariniṣpannād ananyatvāt pariniṣpannavat //
- ④ [H.Buescher 142,6]:
kuśalo viśuddhāmbanāt kṣematvād anāsravadharmamayatvāc ca
- ⑤ 前述した『三十論』安慧釈(注②)に用いられた viśuddhyāmbana を Vinitadeva 釈は「ここでは道が清浄の語で示されている lam ni 'dir nam par dag pa'i sgras bstan to」と解釈する。(P58a8; D53b6)
- また、Ratnākarakṣānti の *Prajñāpāramitopadeśa* でも同じ方向で説明している。
gsum pa ni nam par dag pa'i don du [138b3] dmigs pas don dam par yod pa ste / nam par dag par bya ba'i phyir / de la dmigs pa yin gyi kun nas nyon mongs par bya ba'i phyir ni ma yin no // gzhan gyi dbang gi ngo bo nyid la yang yongs su grub pa'i rang bzhin gyis dmigs na don dam par yod par* 'gyur la / kun brtags pa'i [138b4] rang bzhin gyis dmigs na ni kun rdzob tu yod par 'gyur te / kun nas nyon mongs pa'i don du dmigs pa'i phyir ro // kun nas nyon mongs pa'i phyir dmigs pa ni nam par byang ba'i phyir ma yin no // [P156b7-157a2; D138b2-4] (* don dam par yod par: P. don dam par).
- 第三(円成実性)は清浄のための所縁であるから勝義有である。清浄のための所縁であり、雑染のためのものではないからである。依他起性もまた、円成実のものとして所縁とされる場合は勝義有となるが、一方で遍計所執のものとして所縁とされる場合は、雑染のための所縁であるから世俗有に他ならない。雑染のための所縁であり、清浄のためのものではないからである。(和訳にあたって、中国蔵学研究中心 Luo Hong 氏のご厚意により龍谷大学の桂紹隆先生主催の「般若波羅蜜論」研究会に提供された、未出版のサンスクリット校訂テキストを参照させていただいた。ここに謝意を表したい。)
- ⑥ [Na 73,23-25; Ta 48,19-21]:
①vyavasthānaṃ ②tathā dhātuḥ ③sādhya ④sādhana ⑤dhāraṇā// V.27cd//
⑥avadhāra ⑦pradhārā ca ⑧prativedhaḥ ⑨pratānatā/
⑩pragamaḥ ⑪prasāthavmaṃ ca ⑫prakarṣālambanaṃ matam// V.28//
①安立するもの、②そのとおりの界、③成立されるべきもの、④成立させるもの、⑤受持するもの、(V.27cd)
⑥理解し受持すること、⑦個々受持すること、⑧了達すること、⑨増長させること、⑩理解が深められること、⑪平静平等に流れるごとくにあること(等運)、⑫最勝の所縁であると考えられる。(V.28)
- ⑬ 教法と真如が全十二所縁に働く根拠は、MAVBh 当該箇所最後の纏めとして、「それ故にその最初の二つのものは、それぞれの段階に、それぞれの所縁の名を得る tad eva hi prathamadvayam / tasyāṃ tasyāṃ avasthāyāṃ tattadālambanaṃ nāma labhate」という釈文で明らかになる。MAVBh [Na 73,21-74,18; Ta 48,17-49,10] より要約すれば次のような解釈である。

	所縁の名	説明
1	安立するもの vyavasthāna	波羅蜜多・菩提分・聖諦などの設定された諸法
2	法界 dharmadhātu	真如
3	成立されるべきもの sādhya	法界を了解することによって波羅蜜多などの法を了達することになる
4	成立させるもの sādhana	
5	受持 dhāraṇā	聞所成
6	理解受持 avadhāraṇā	思所成
7	個々受持 pradhāraṇā	修所成
8	了達 pravedha	初地・見道
9	増長される pratānatā	第二地から第七地・修道
10	理解が深められる pragama	第七地において、種別として法を理解する
11	等運 praśaṭha	第八地
12	最勝 prakarṣa	第九地
		第十地
		如来地

②⑦ [Na 41,22-42,1; Ta 22,7-9]:

nirvikārāvīparyāsaparinīṣpattito dvayam// 3.11cd//

asaṃskṛtaṃ avikāraparinīṣpattiyā pariniṣpannam/saṃskṛtaṃ mārgasatyasaṃgrhitam aviparyāsaparinīṣpattiyā punar jñeyavastuny aviparyāsāt//

②⑧ 早島慧の一連の研究によれば、MSA.VI.Tattva 章に説かれる勝義は、真如とそれを対象とする智慧と解釈されるが、涅槃と道に対する直接的言及は確認されない。この点について、本格的に言及するのは MAV-III に至ってからと考えられる。(同氏の博士学位請求論文)

②⑨ このことは同学派の文献に説かれる円成実性の定義に現れるが、ここで詳しく論じることできない。これについて、近年の三性説の代表的な研究である兵藤一夫2010にも集成されており、本項と次節での考察する三性説を論述する際には同書を参照した。

③⑩ その典型として、以下の Ratnākarakṣānti の Prajñāpāramitopadeśa の一節を引用しておく。「まさにそれ故、それ（正智）も円成実性である。無顛倒の円成実〔性〕という観点で無迷乱であることこそが、その円成実〔性〕である。一方、真如は円成実性である。何故ならば、無変異の円成実〔性〕という観点で、変異しないことこそが、その円成実〔性〕であるから」。(和訳は注②④と同じく、未出版サンスクリットテキストを参照したものである。チベット訳はかなりの相異がある。Tib: D142b5-6)。

③⑪ 注④参照（ボールド部分）。

③⑫ 第 XI 章第41偈、長尾雅人研究ノート-2, pp.94-95;

③⑬ [H.Buescher 124-126所収]

niṣpannas tasya pūrveṇa sadā rahitatā tu yā//21//

ata eva sa naivānyo nānanyaḥ parataṃtrataḥ /

anityatādivad vācyo nādr̥ṣṭe 'smin sa dr̥ṣyate//22//

一方、円成実〔性〕はそれ（依他起性）が前のもの（遍計所執性）を常に離れていることである。(第21頌)

だからこそ、それ（円成実性）は依他起〔性〕と決して別ではなく、別でないのでもない。〔円成実性は〕無常性などの如くに語られるべきである。これ（円成実性）が見られないとき、それ（依他起性）は見られない。（第22項）

- ㊤ 『三性論』の著者を世親に帰すことについて異論がある。しかし、写本やチベット訳は世親著と伝え、またそこに説かれる三性説は世親の三性説と違いがないので、写本が伝えた通り世親の著作としてもよいと思われる。

㊦ 注④特に波線部を参照。

- ㊧ MAVT [Ya 229.5-9; Ms 74a6-7]

mahāyānadeśanādharmāḥ suviśuddhadharmadhātuniṣyandatvād viparyāsapratipakṣālabhanatvāc ca pariniṣpannaḥ svabhāva ity ucyate / so 'rthaḥ kalpītasvabhāvasya bhavati na tu parikalpitaḥ, ataḥ sadasattā pariniṣpanna ity uktam ity apare / 「大乘の説示の法は極めて清浄な法界の等流であるから、そして顛倒の対治の所縁であるから、円成実の自性と言われる。それ（大乘の説示の法）は分別された自性を有する意味であるが、遍計所執〔性〕ではない。それ故、有性と無性は円成実と言われる」と他の者たちは〔語る〕。[Tib: P150b5-7; D302a7-b1].

- ㊨ Kā 21cdの説明、すなわち同論の円成実性解釈の箇所、安慧はこの一文をもって解釈を始めるのである。avikārapariniṣpattiyā sa pariniṣpannaḥ [H.Buescher.124,8]

- ㊩ *Abhidharmadīpa-vibhāṣāprabhāvṛtti* には、『俱舍論』の著者世親は説一切有部から墮落し（sarvāstivāda-vibhraṣṭi）、方広（大乘）派に従った人（vaitulika）であるとして、世親の主張とされる三性説を激しく批判している。この情報から、当時、三性説の主唱者が世親であると見なされていたことが知られる。（P.S. Jaini [1977, p.128] の指摘より。P.S. Jaini が用いた根拠は同校訂 p. 282に確認できる）。

キーワード：中辺分別論、円成実性、有,sat、無,asat、真実,tattva、清浄所縁,viśuddhyālabhana、世親,Vasubandhu、安慧,Sthiramati。